



2月17日（金）校長講話

荒野に希望の灯をともし～中村哲さんの生き方～

今日は一人の人物を紹介します。

みなさん、この人を知っていますか？「中村哲さん」と言います。中村さんの職業は何でしょう？この写真を見てください。大きなショベルカーを運転しているのは中村さんです。重機オペレーターでしょうか？実はお医者さんです。お医者さんがショベルカーを運転？…ちょっと意外ですね。中村さんはお医者さんでありながら、アフガニスタンという国で現地の人々と力を合わせ、乾き切った大地に7年もかけて25キロに及ぶ用水路を作ったのです。

今日は、医者である中村さんがどうして用水路をつくるようになったのか、中村哲さんの生き方や考え方から学びたいと思います。最初に国の位置関係を確認しておきましょう。舞台はパキスタンとアフガニスタンです。

中村さんは1984年、パキスタンの都市ペシャワールの病院で働き始めました。担当したのは、ハンセン病という病気の診療です。（ハンセン病という名前を聞いたことがある人もいるでしょう。日本でも人権問題と深いつながりのある病気です。人権教育の時に詳しく学びましょう。）病院といってもちゃんとした道具はありません。ピンセットはねじれ、聴診器も壊れていて、耳にはめるとけがをしたそうです。しょっちゅう停電が起き、懐中電灯で照らしながら手術をしたこともありました。患者もおんぶして運んだそうです。

その頃、パキスタンの隣にあるアフガニスタンでは、戦争が起きていました。ソビエト連邦共和国（今はもうありませんが15の国が集まって一つの連邦国家を作っていました。今、戦争をしているロシアとウクライナは同じソ連の中にあった国です）が、アフガニスタンに攻め込んだことにより戦争となっていたのです。ソ連との戦いが終わっても、国は混乱し、内戦（国の中の争い）が続いたのです。中村さんが働く病院に来る患者のうち半分は、アフガニスタンからパキスタンに逃げてきた人たちでした。中村さんは、アフガニスタンには医者がない村がたくさんあり、多くの人たちが困っていると知り、内戦の中をかいくぐり、険しい山々を超えて1991年にアフガニスタンに診療所を開きました。地域の人々は心から喜んだそうです。

しかし2000年春、戦争に苦しむアフガニスタンで、さらに大変なことが起こりました。雨が降らない「大干ばつ」です。大地がカラカラに乾いて畑は砂漠のようになり、大切な小麦がとれなくなりました。水や食料がなくなり、子どもたちは地面の泥水を飲んでいました。それが原因で病気になり、多くの人たちが亡くなりました。「水不足や飢えに薬は役に立たない。医療より水だ、水を手に入れなければ」。困っている人たちを見かねた中村さんは、井戸掘りを始めました。村人、日本から来たスタッフと力を合わせ、2001年9月までに掘った井戸の



数は660ヶ所、その90%で水を出しました。そのお陰で多くの命が救われたのです。

喜んだのも束の間、2つの悲劇がアフガニスタンを襲います。1つは2001年9月11日にアメリカで起きた同時多発テロ事件です。「この事件を起こしたテロリストたちをアフガニスタンがかくまっている」ということで、アメリカを中心とする多国籍軍は報復攻撃を始めました。アフガニスタンのほとんどは農民です。テロリストとも、テロリストをかかった一部の人たちとも無関係ですが、再び国民は争いに巻き込まれてしまったのです。2つ目は地球温暖化によるさらなる干ばつです。掘った井戸から水が出なくなり、さらに深く掘り進めてようやく水が出て、また涸れてしまうのです。

「どうすればいいのだろうか？」中村さんは考えた末、決断します。クナル河という大きな川から直接、水を各村に届けるための用水路をつくることを決心しました。『緑の大地計画』と言います。

周囲からは無謀だと言われました。医者の中村さんは、井戸は掘っても、用水路は作ったことがありません。全長25キロの大工事、クナル河からどう水を取り入れ、どんな風に用水路を作っていくのか、素人が挑戦するには想像もつかないことばかりです。中村さんは一から土木工学の勉強を独学で始めました。難しい計算も必要になり、時には高校生の娘さんから教科書を借りて、苦手な数学を一生懸命勉強し直したそうです。中村さんを突き動かしたものは「とにかく水だ。100人の医者より、1本の用水路だ!」という思いでした。ついに設計図ができ、工事は始まりました。上空では戦闘ヘリが飛んでいます。空から銃撃されたこともありました。



この工事にはある特徴があります。現代の日本のようにコンクリートや鉄筋を使うやり方は行っていません。むしろ日本に昔から残っている用水路の作り方を研究し、それを取り入れたのです。どうしてだと思いますか？中村さんは言います。「用水路を使うのは現地の人です。たとえ壊れたとしても、現地の人たちで直して使い続けられることが重要なんです。」用水路を作るだけでなく、壊れた時のことまで考えていたのですね。

2010年、ついに用水路が完成しました。名前は「アーベ・マルワロード」。地元の言葉で、“真珠の水”という意味です。近くの村々には水が行きわたり、小麦やオレンジ、大根など色々な作物ができるようになりました。もともと砂漠だった場所までが緑に生まれ変わり、地元の人たちも大喜びしました。その後も、近くの住民たちに頼まれて、用水路を造り続けました。中村さんの水路のお陰で16500ヘクタール（東京ドーム3500個分）が農地としてよみがえりました。これは65万人の人たちが飢えずにすむ食糧を確保できる広さなのです。



昨年、中村哲さんのこれらの取組が劇場版「荒野に希望の灯をともす」で映画化されました。私も見てはいませんが、予告版を流すので見てみましょう。（予告版の動画視聴）

2019年12月4日、中村さんはいつものように用水路工事現場へ車で向かう途中、何者かに銃で撃たれ命を落としました。73歳でした。数えきれないほど多くの方がその死を悲しみ、涙をこぼしました。

私が中村さんの生き方すごいと思うところは、映画のタイトル「荒野に希望の灯をともす」にあるように、人々に“希望”を与えた生き方です。医療を通して人々に生きる希望を与えました。さらに大干ばつで苦しむ人々を見て、一時の食糧援助だけでなく現地の人々が自給自足し自立できるように用水路を作り、砂漠を緑の土地に変え、生きていく希望を与えました。まさに「希望の灯をともす人」でした。

今日は中村哲さんを紹介しました。全校の皆さんも、その生き方から大切なことを感じ取ってもらえると嬉しいです。なお、城石先生が図書館に中村哲さんの伝記を入れてくれました。この本には今日お話をしたこと以外に、どうして医者を目指したのか、なぜ海外に行ったのか、用水路を作るときの困難やそれをどう乗り越えたのか、などとてもわかりやすく書かれています。機会があれば、ぜひ読んでみてください。

